

集落の立地環境と機能よりみた檜川村の空間構成

吉田隆彦

序.

I. 自然環境と集落

II. 機能別にみた集落

1. 宿の集落 奈良井と贄川

2. 地場産業の集落平沢

3. 交通路に沿う集落

4. 林業で生きてきた川入の集落

III. 住民の去った集落

1. 農林業の不振とたたかった 桑崎

2. 湖底に姿を消した川入下の集落

3. 人口減少の続く川入上の集落

結語.

参考文献

英文要旨

序.

人の住まいのかたまりは、しばしば集落と呼ばれる。住まいがかたまる理由は、社会生活を営む必要があるからだだが、それはまた、いろいろな自然環境を反映する。奈良井宿を例にとれば、その起源は近世の宿場であるが、そこではまた、曲げ物細工、漆器、木工業も育ち、集落の規模は近世末に409軒、人口で2,155人に達していた。近代には帝室林野局木曾支局奈良井出張所も置かれ、かくして奈良井の集落の、中山道に沿って北東-南西方向に伸びる町並みはすでに、洪水を逃れることができる平坦地すなわち「容器」の、ほぼいっぱいになっている。それ故、明治末期、中央線の奈良井駅は、奈良井川にかなり寄って造られた。

平沢の駅は昭和5年にできたが、これは漆器業が成長した結果であった。鉄道との結合が、木材や漆の買付けと製品の販売に極めて有利になり、さらに平沢を大きい集落へ育てた。敗戦後の昭和25年、平沢には、中央線以西の部分だけで309世帯、1,576人が住んでいた。そして奈良井と同様、平沢も、奈良井川の氾濫原と低位段丘の「容器」があって、大きい集落に成長できたのであった。

檜川村には、こうした、むしろ市街地と呼ぶべき大きい集落がある反面、後述する川入地区では、生活は農耕よりも林業労働によったので、小規模な集落が分散することになった。檜川村には、こうした両極端のタイプがあった。

本報告ではまず、檜川村の集落の背景にある自然環境の概要を述べ、ついで地形により集落を三つに分ける。また、産業や交通と集落の働きに注目し、集落の盛衰の様子を、土地利用との関連から考察していきたい。

I. 自然環境と集落

檜川村では、集落の特徴は、その高度（標高）と、その地形とに、端的に出る。まず、檜川村の集落のすべては高冷地に該当する。高冷地とは、農政上の用語で、長野県では標高が

800m以上ある農地をさす。長野県の緯度だと、この区域は、8月の平均気温が22°Cをきる。降雪が早く、遅霜の害も受けやすく、冷害を受ける頻度も高く、従来は集約的な農業経営には不利であった。

檜川村は全域が高冷地に該当し、その上、傾斜地が多く平坦地に乏しいから、漆器、曲げ物など、土地をあまり広く使わずに済む工業を除き、近代的な産業にも、制約が大きかった。

1. 集落と高度

高度からみた檜川村の集落は、次の表-1.のようにまとめられる。これは、縮尺1:10,000の村図から読み取ったおよその値である。桜沢から贄川宿周辺までが800m台、平沢周辺が900から930mくらい、奈良井宿とその周辺が930から960mくらい、栃窪で970mである。奈良井ダムの底に沈んだ、糠沢、曲淵、表塩水、奥塩水が1,000mから1,080m、そして羽淵が1,100mを越す。桑崎がほぼ、羽淵集落と同じ1,000-1,100mの高さにある。

檜川村の集落は最も低い桜沢でも高度が810mはあり、最も高所にあるのが萱ガ平で、1,300mである。高度が1,300mというのは、観光地を除き、木曾郡下では最も高い。開田村の集落も高いが、それらはみな傾斜の緩やかな河川の氾濫原上にあり、それを活用して高原野菜などの栽培が浸透している。萱ガ平のように傾斜の急な斜面に周りを囲まれ、広い農耕地をもたずに集落が維持されてきたのは木曾郡内でも特異である。

2. 檜川村の集落と地形

檜川村の集落が乗る地形は、1) 奈良井川にそう細長い氾濫原と、2) 奈良井川とそれへ流入する支流の作った新旧(高低)および大小様々な段丘面、の二つに大きく分けられる。そして、3) 断層に起源のあると考えられる土流堆積物から成る緩斜面を、段丘地形が変形した、三つめの地形として加えたい。

表-1. 標高による集落の類型

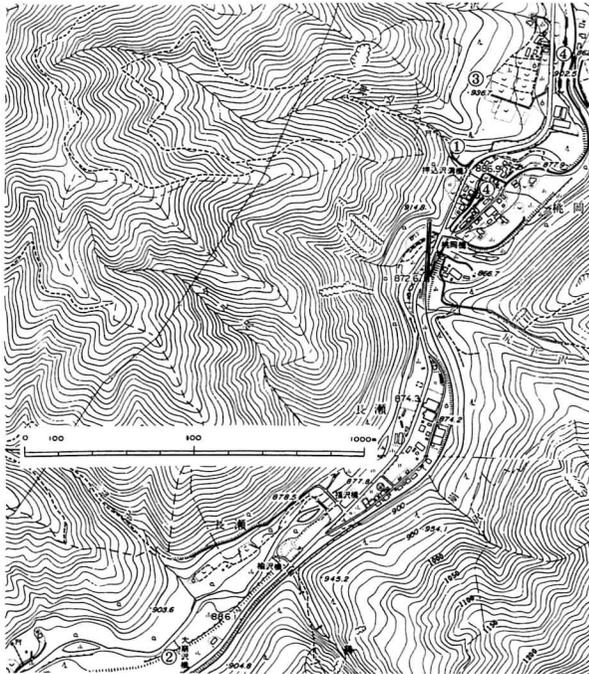
標 高	集 落
810-900m	○桜沢(810-820m) ○片平(840-850m) ○865-870m(若神子) ○中畑(870m) ○下遠(870-880m) ○折戸(880-900m) ○贄川宿, 七軒町, 権現原(880-900m) ○桃岡(890m) ○長瀬(875m) ○宮下(890m)
900-1,000m	○平沢旭町(910-940m) ○平沢上, 中, 下町(900-910m) ○太田, 母沢, 檜川小学校(910-930m) ○奈良井三ノ段(930m) ○奈良井宿(940-960m) ○栃窪(970m)
1,000-1,100m	○糠沢(1,060m) ○曲淵(1,030m) ○表塩水(1,040m) ○奥塩水=上ノ原(1,070-1,080m) 羽淵(1,100-1,130m) ○桑崎(1,020-1,100m)
1,100m以上	○番所(1,160-1,170m) ○楠(1,240m) ○萱ガ平(1,290-1,300m)

檜川村作成「1:10,000 檜川村全図」(平成4年)による



第1図 氾濫原ぞいに細長くのびる奈良井宿
①旧中山道②明治の新道③三ノ段④天照(あてら)沢
⑤カッ沢⑥池ノ沢⑦940mの等高線⑧東町裏⑨八幡社

第2図 氾濫原と小段丘の平沢集落と周辺
①中山道 ②金西町 ③東町 ④東町裏 ⑤諏訪神社



第3図 氾濫原上の長瀬および桃岡集落と周辺
①押込沢 ②地場産センター ③権現段丘(上原) ④中央線旧軌道

2-1) 氾濫原上の集落

氾濫原は、文字どおり河川の氾濫でできた土地で、本報告では現在流れている川と同じ高さの土地、とする。檜川村では、奈良井宿が、まず、あてはまる。鉄道が通り、奈良井営林署の渡場（土場、木材積み替えの集積所）が別の利用に変わって、川が見えにくい、奈良井宿は、細長い氾濫原に沿って形作られ、鉄道も駅も氾濫原に近い高さにある。地形発達史の立場では、さらに厳密な記述が必要である。島田（1970）によれば、奈良井宿の町並みは奈良井川の河床からの比高が5 mほどある段丘上にある。これは平沢の、金西町より一段高い、比高が同様5 mほどの、本通りや東町を載せる面に相当するようである。そして奈良井宿をカツ沢や池の沢の流末が横断して、奈良井川に入っている。これらの沢は台風や梅雨の豪雨時にはしばしば氾濫、宿に土砂を押し流す。近年では昭和53年6月の梅雨前線豪雨や昭和58年9月の10号台風時が顕著であった。筆者には詳細な地形分析ができないが、段丘上の高まりには、奈良井川の作った以外のものもあるのではないかと考える。

地形学的厳密さからいえば問題があろうが、筆者は奈良井宿を、ひとまず氾濫原上の集落としたい。

第1図は縮尺1:10,000の村図（平成4年改訂）の、奈良井宿周辺である。この図は縮尺1:2,500の基本図を縮小したものである。等高線が10m間隔なので、宿内の地形の凹凸はよくわからない。けれど、「中央橋」から左岸下流を走る940mの等高線が、宿が奈良井川に向かって傾斜する様子をわずかに現す。それが、カツ沢や池ノ沢の氾濫で堆積した土砂によるらしいことも示唆する。JR奈良井駅のヤードがかなり川寄りなのも、川と落差があることも読みとれる。

平沢も氾濫原の上にある。ことに中山道から西側（西町裏、金西町）一帯は、戦後、堤防の改修が反復され、現在も大雨の時は緊張が走り、住民は氾濫原上の住まいを実感している。ただし、平沢の中山道の通りや東町、東町裏は、さきにふれたように、比高5 mていどの低い段丘上にある。

氾濫原のもう一つは、宮下の、県営住宅のある区域である。ここは村役場よりも一段低く、いつも奈良井川の流れる音が聞こえる。また、上流の右岸で、綿沢と母沢に挟まれた、檜川小学校のある区域も、奈良井川の氾濫原に相当する（第2図参照）。

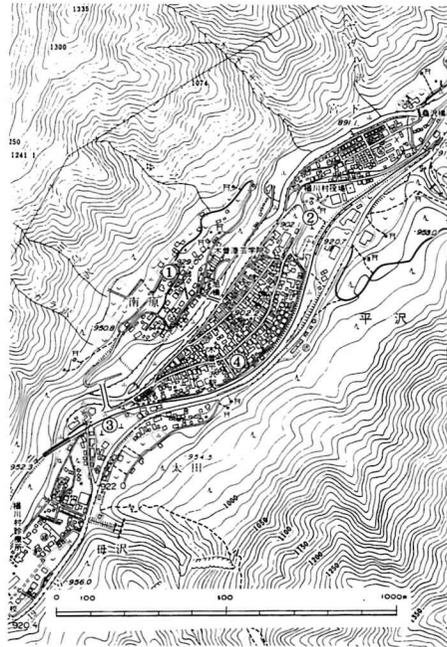
贅川では、長瀬集落がある。国道19号と鉄道との間は、昭和50年まで田で、以後、大きな漆器工場になった。平成6年5月、その上手の19号と奈良井川の間に地場産業センターが出来、景観がさらに変わった。ここも奈良井川の氾濫原が広く、砂礫地である。今、小さな堤防がある。長瀬の下手が桃岡集落である。桃岡集落は、権現段丘の崖の南側で、押し出の押し出しのために、流れが少しゆがんだ奈良井川に面している。奈良井川の河原の上に押し出しが出、集落がその上の緩斜面にあるらしく、これも地形学上問題になるであろうが、ひとまず氾濫原と同様のものとしておく。

平地に乏しい檜川村では、洪水の危険がある氾濫原でも貴重な空間である。この氾濫原に、平成2年の国勢調査によれば、檜川村民のおよそ59%、2,570人の人々が暮らしている。

2-2) 段丘上の集落



第4図 段丘上の集落の例 羽淵付近
①羽淵集落 ②奥塩水(上ノ原)集落跡 ③権兵衛街道



第5図 平沢集落周辺の段丘
①崖錐下の湧水 ②諏訪神社の段丘面
③諏訪神社面相当の太田の段丘面
④蛇行の結果とおもわれる低位の段丘

段丘は、かつて川が流れてできた平坦な土地が、気候あるいは地盤の変化で再び侵食され谷が刻まれる状態になった地形である。檜川村では多くの場合、そのような段丘の上に山腹から土砂が崩れ落ちてたまり、段丘面は崖錐状になって傾斜している。檜川村の段丘の詳しい分類については、1990年から翌91年にわたる、佐藤敏彦信州大学名誉教授(元教養部)の調査がある。これは平成8年に刊行される『檜川村誌 自然編』に詳しく報告される予定である。本報告でも佐藤名誉教授から貴重なご教示を多く賜っているが、筆者の都合に十分なスペースをとれず、詳しくふれることができないのを申し訳なく思う。

日本の大きな完新世の平野に接する更新世の台地は一般に広大な平坦面をもつ。しかし檜川村の台地や段丘の、ほとんどを厚い崖錐性堆積物が覆い、表面は傾斜した状態である。この傾斜地が、氾濫原とならんで檜川村民の、もう一つの生活の舞台となってきた。

奈良井川沿いに、上流から下流へ、わかりやすいものを例に見ていく。奈良井ダム周辺では羽淵集落がある。その下流で、今はダム工事のため無人になったが、奥塩水(上ノ原)もこれにあてはまる。小さいがダムサイト近くの糠沢もそうである。

奈良井宿周辺では、権兵衛橋南側たもとの天照沢の家々もそうである。村営保養センターならぬ荘も段丘の上にあるし、ここから眺められる奈良井宿背後の城地籍は段丘を崖錐が覆っている好例である。奈良井宿寄りでは、北東部の八幡神社周辺と駅周辺の高台の家々があ

てはまる（第1図参照）。

第4図は羽瀨集落付近の様子である。図中の番号2.の奥塩水集落跡は、奈良井ダム建設の際骨材を採取したので、移転してなくなった。旧権兵衛街道は羽瀨集落を抜け、姥神峠へ向かう、図中では破線になっている。ダムの上手には土砂の堆積がみられる。

平沢では、太田地区の国道19号の両側が該当するし、金西町対岸の旭町のほぼ全体が段丘上にある。ここはかつて南原といわれていた畑地であった。佐藤名誉教授によれば、段丘末端にあった崖が上を覆った崖錐で大きく崩壊しているとのことである。それを裏づけるものであろう、現地の畑では、大きさの不揃いな角ばった礫が極めて多くみられる。ここ、旭町では、村営水道のできる昭和40年まで、崖錐末端の湧き水をパイプでひいて飲料水としていた。これも段丘を崖錐堆積物が覆っていることの傍証となろう。崖錐のない普通の段丘の上では水を得にくいからである。

贅川では、長瀬と桃岡以外の集落すなわち、贅川宿の、上・中・下三町も、鉄道を西に越えた七軒町も、その北の、贅川沢を越えた折戸から、下遠、中畑、若神子、片平を経て桜沢に至るまでの集落はみな段丘面上にある。佐藤名誉教授によれば、JR権現トンネル真上の上原（かんばら）から片平まで、一連なりの面として理解できるという。

贅川では、いちばん上流の長瀬と桃岡が平坦な土地が最も広く、そして下流に行くほど谷が狭くなって、桜沢集落で奈良井川が深い峡谷になる、というのが興味を引く。なぜなら、ふつうは、川の上流ほど谷は狭く川床の傾斜もきつく、下流になれば谷は広く傾斜もゆるやかになるからだ。奈良井川は、贅川の部分では、我々の常識にはない流れ方をしている。

2-3) その他の地形（大きく変形した段丘地形）

空中写真の判読からは、萱ヶ平は、奈良井川の支流栃洞沢の右岸に広がる緩斜面の上にある。緩斜面の背後（北側）には、傾斜がそこで急に変わる山麓線が、南東—北西方向に直線状に続く。栃洞沢はこの緩斜面の南の縁を40-50mほど深く切り込んで直線状に西流して、ほぼ直角に奈良井川に入る。付近には、これに相当する広さや高さの緩斜面はない。佐藤名誉教授によれば、土石流による堆積物に由来する緩斜面とのことである。ちなみに、「萱ヶ平」や、緩斜面下方の「菅ノ原」という地名は、地形とともに、緩斜面の土地利用をも表している。

萱ヶ平付近の詳しい地図は第7図だけなので、地形以外のことも述べる。栃洞沢の出口のバス停留所は、昭和33年から運行を始めた、松本電鉄の路線バスの終点である。昭和51年から村営になった。その上流、「白川製品事業所」は、奈良井営林署が設置した、寸法を揃えた丸太材の集積所である。

いっぽう、桑崎集落は、桜沢の溪流が牛首峠の上手で北東—南西の方向をとっている谷の斜面にある。栃洞沢の右岸だけに緩斜面が展開する萱ヶ平と似て、桑崎でも、桜沢の右岸だけに緩斜面が展開している。だから耕地も集落も、ほとんどは右岸側にある。空中写真からは、右岸の沢の上流から出た押し出し状の堆積物を判読できる。

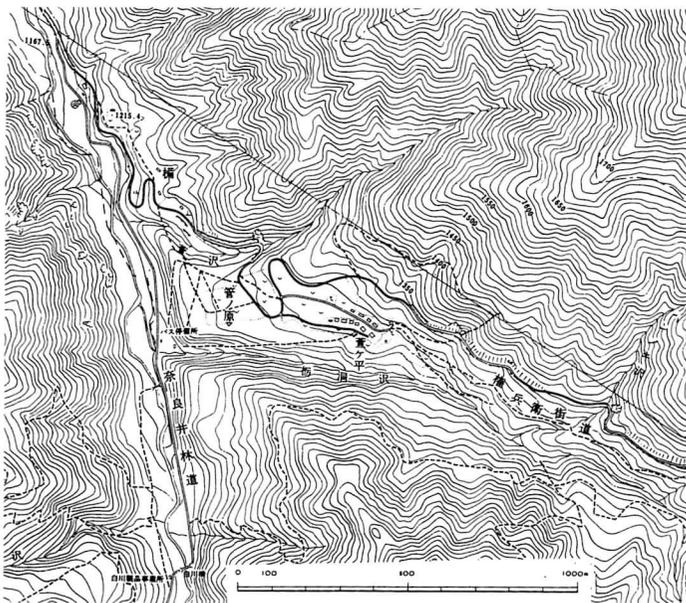
対岸の北側は急な斜面で贅川方面との分水嶺になる。北東—南西方向に伸びる、桜沢の上

流の虫沢に沿い、林道桑崎線を登って行くと、1,168.6mの標高点で都合沢との分水嶺になり、かつて桑崎集落から賛川小学校まで、生徒達が毎日使った通学路に入る。これをすこし下ると、道路が粘土を含んで荒れた状態であるのに気付く。断層破砕帯が通過しており、山腹が崩壊しやすくなっているのである。桑崎集落を乗せる緩斜面も、そうした破砕帯に由来する、堆積物を含んでいるであろう。石ころだらけなのに、それに混じる土砂の粒が細かいので、住み着いた祖先達が耕地を開くのを可能にしたのである。

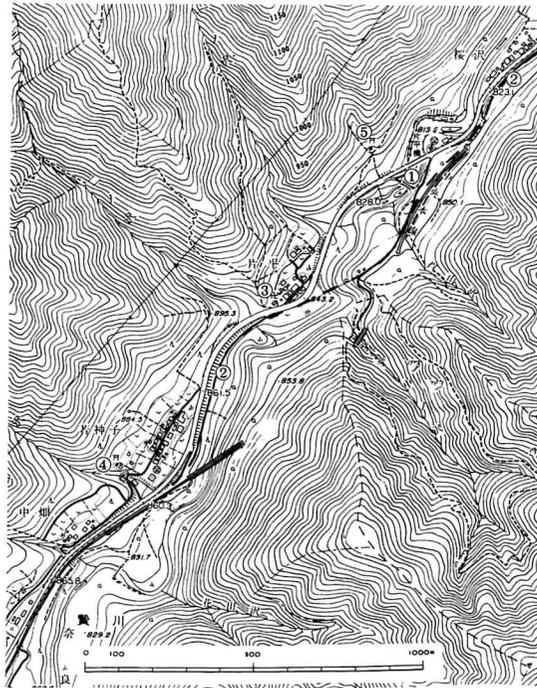
両集落とも背後に断層の存在が考えられ、さらに豪雨などが引金になって山腹から落下した崩壊物が堆積して段丘の地形を变形させたと思われる。

II. 機能別にみた集落

集落には、発生から今日に至るまでの歴史と、社会や経済の変動と、町造りなどの文化とが、いろいろに刻み込まれている。視覚でもとらえられるそうした様子を、一般に景観と呼ぶ。



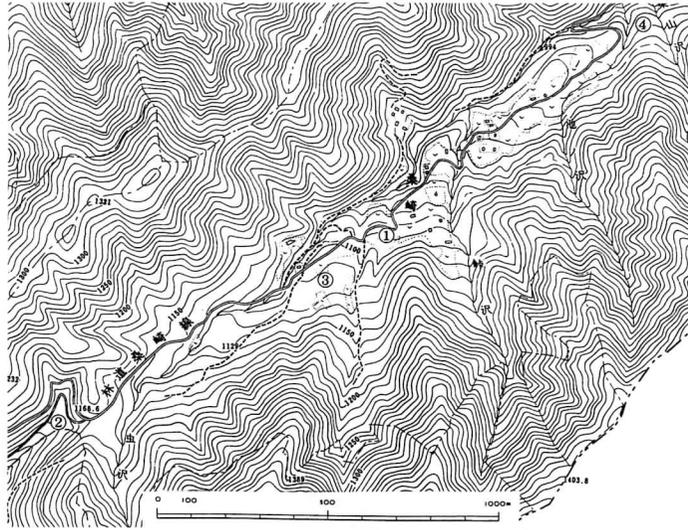
第7図 萱ヶ平付近の状況



第6図 桜沢から中畑付近までの、沢で切られている段丘
①旧道片平橋 ②国鉄中央線旧軌道(複線化前) ③鶯着寺
④ 諏訪神社 ⑤白山社

奈良井、賛川、平沢の、楢川村の三大集落の景観を集落の働き(機能)とともに追ってみよう。はじめに、宿場起源の奈良井と賛川について述べ(1.)、ついで地場産業のつくった平沢集落を述べる(2.)。

また、楢川村の集落は交通から大きな影響を受けてきたから、交通路に沿う集落に関して述べ(3.)、最後に林業に依存して生きてきた集落について述べる(4.)。



第8図 桑崎集落周辺

1.桑崎分校跡 2.都合沢 3.檀川牧場跡 4.開拓地跡

1. 宿の集落 奈良井と贅川

1-1) 奈良井宿の中心の区域

奈良井宿は天保14（1813）年の『中山道宿村大概帳』によれば、町並みは東西八町五間（約870m）あり、家は409軒、住民2,155人を数え、峠を控えた大きな宿だったという（長野県教育委員会，1984）。贅川宿は、同様にして長さ四町六間、136戸733人であったので、長さで奈良井宿の二分の一、住民の数では四分の一の規模であった。

昭和53年に伝統的建造物群保存地区に指定され、電柱やテレビアンテナを撤去整理して、宿場らしい景観の再現に努力している。しばしば火災を被った贅川宿に比べ、建物だけでなく、短冊形の地割りに由来する奥行き深い建物もよく残されている。奈良井宿は近代以後も、中山道から川入方面へ向かう交通路の分岐点であり、奈良井営林署とその森林軌道の終点と渡場とが置かれ、伝統の曲げ物加工や木材加工工業も漆器業と共に盛んで、さらに鉄道の駅も開通時から設置されて、商業もあり、街としての活気を長らく維持してきた。営林署関係の仕事が減り、木工業も低調になった昭和50年代には、それに代わり観光地として名が知られるようになり、大名行列、お茶壺道中、宿場祭、木曾写真コンテストといったイベントでは客を全国から集めるようになっている。

宿の配列は、京よりの鎮神社から奈良井駅方向に向かって上・中・下各町と名付けられ、中山道の通りを中心に、奈良井川寄りが東町裏、段丘寄りが西町裏と呼ばれる。東町裏には豊口水路が流れ、防火用水や水車の動力源になっていた。西町裏から段丘までは、いわゆる寺町で、南から北へ、浄竜寺、長泉寺、大宝寺、法然寺、専念寺の五寺と、付属の墓地があり、寺の周りの木立が宿に潤いを与える。同様に寺町の中は、南から北へ、鎮神社、若宮神社、神明宮、そして北端の段丘上に八幡社がある。これら社寺の北に町に平行に段丘の崖が

続く。段丘面を刻んで、南から北へ、宮沢・池ノ沢・カツ沢・ドウボラ沢が流下して、奈良井宿の五か所の水場の水源となってきた。

段丘崖を登りつめると眺望が開ける。奈良井宿の起源は、木曾氏と松本盆地の豪族達の挟間を生き抜こうとした、奈良井氏の館の城下町ともいわれるが、そのためか、段丘面は城と呼ばれてきた。今は荒れているが、一面の畑で、養蚕の盛んな頃は桑畑もあった。中山道に代わる明治の新道はこの段丘面を通過して鳥居峠に向かっていた（第1図 奈良井宿周辺参照）。

奈良井宿内とその周辺の、漆器業と、曲物を含む木工業は、平成2年の場合、前者が22業者、従業者数92人、後者は11業者、29人である。住民は、355世帯1,161人なので、伝統産業従事者をすべて奈良井の住民とみなしても、平沢に比べればその重みはそう大きくはない。しかし、宿内のそこ、ここに漆器店の看板が見え、通りを歩く人にアピールして店舗が構えられ、宿景観の構成要素になっている。

奈良井宿周辺...2) 橋戸沢付近

戦前、奈良井に居住していた在日朝鮮人の人々は、現在檜川中学のある段丘の北から東側へ出てくる橋戸沢の出口付近に粗末な住居を建てて住んでいた。また、橋戸沢では、戦後しばらくの間、奈良井営林署の伐採作業があったので、営林署で働く人々の住居もあった。昭和25年の国勢調査では、橋戸沢は単独の調査区に設定され、調査に際して作成された照査表と世帯主の名簿から、国勢調査に先立ち、橋戸沢には25世帯114人の住民を数えることができた。

昭和30年には、国有林の伐採も一段落して、住民は6世帯29人に減った。統計調査区は、鉄道と奈良井川を東に越えた、檜川小中学校を含む調査区（神矢沢）に吸収された。それ以後現在まで橋戸沢地区には住居はない。

奈良井宿周辺...3) 営林署渡場付近

JR 中央線奈良井駅の東側には、かつて営林署の貯木場があった。昭和25年、奈良井営林署の森林軌道の終点付近には、機械の倉庫や車庫があり、その周辺に、8世帯23人が住んでいた。これは昭和30年には11世帯40人へと若干増加した。住民は大部分営林署勤務であった。昭和33年に軌道は撤去されたが、貯木場と車庫、倉庫はそのまま残っていた。川入方面での官行造林や伐採事業が一段落した昭和40年代になると、営林署の渡場の貯木も姿を消し、空き地が広がった。昭和60年、もとの渡場では、住宅は16戸で30年とあまり変わっていないが、住宅以外の用途がかなり増えた。その一は昭和59年から操業に入った精密機械のN工業、その二は、村役場の営林署の売却地への「水辺のふるさとふれあい広場（親水公園、昭和60年）」の造成、その三は平成2年の、対岸の19号と親水公園とを結ぶヒノキの「木曾大橋」の架橋である。そのヒノキの大橋を東に越えた、元の河原で、奈良井川と国道19号に挟まれた所は、昭和30年にはまだ家がなかったが、昭和60年には住宅地7軒ができた。

昭和30年代始め、奈良井川右岸を、北端の奈良井大橋から、宿場を通らず奈良井川右岸を鳥居トンネルに向かう、国道19号の工事が始まり、二車線の拡副舗装が完成した40年代はじめから、土地利用が大きく変化した。19号の東側の、段丘（三ノ段）の下から中腹にかけて、

新しい民家12軒が増えた。ここに設置された昭和38年の木曾郡北部三カ村の共同福祉施設「母子センター」は設置後しばらくは大いに活用されたが、少子化の進行で次第に利用者が減り、空いていた建物が、昭和57年からは楢川村商工会の事務所になった。国道19号の改良後、奈良井宿の中から、K木材工業とM商工（ともに製材業）とが、それぞれ広い工場敷地を求めて出て来、漆器業者も二軒来た。三ノ段の西の、19号と奈良井川に挟まれた、マキヤ橋のたもとの区域には、漆器店二軒、喫茶店一軒、自動車修理工場、LPガス倉庫などができた。ここは、右岸から、漆器のサビ土で名を知られたマキヤ沢が奈良井側へ合流する地点である。

奈良井宿周辺...4) 権兵衛橋および権兵衛駐車場

国鉄中央線は昭和42年の軌道改修まで、鎮神社の前を大きく南へカーブして旧鳥居トンネルに入っていた。宮前と呼ばれた鎮神社から中央線の線路までの区域は田で、戦時中は木製航空機の大きな工場があった。

昭和33年の森林軌道撤去後、川入へは権兵衛橋を経由することになり、村は費用を営林署と分けあって橋を改良した。この橋は現在、宿から19号へ接続するのに、住民にも観光客にも、最も重要な橋である。昭和40年代はじめの19号の改修以来、奈良井宿は車の混雑にしばらく苦悩したが、昭和50年、権兵衛橋の上流側に駐車場が完成、蒸気機関車や手洗い場も整備され、観光客には便利になった。これより先、昭和42年の軌道改修でJRの新しい複線の線路は鎮神社前からすぐ新トンネルに入り、豊口方面の旧軌道敷と付近の畑が、民家や漆器工場、木工場に転換した。またJRの新トンネル上の段丘には、昭和56年に村営保養センター「ならい荘」が完成し、この地区もまた大きく様相が変化してきた。

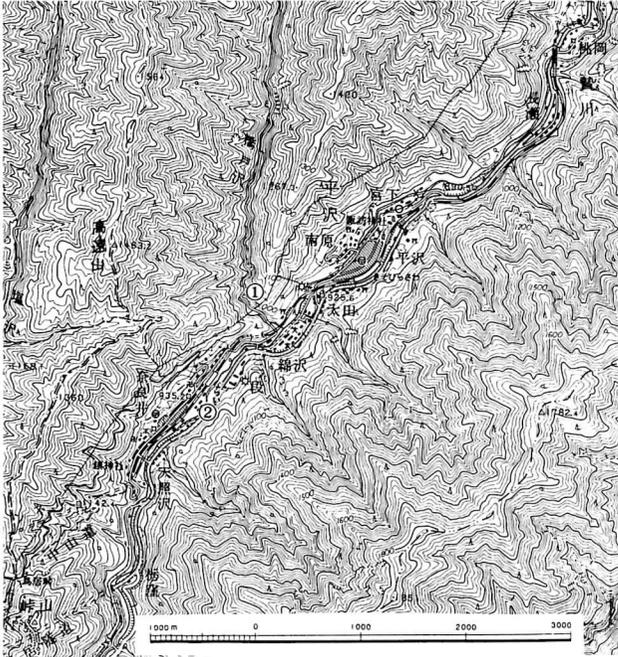
贄川宿...1) 中心地域の概要

贄川宿は福島関の副関のような役目を持っていた。福島関を通らず、野麦道や権兵衛街道などの脇道から来る人や物資の通過を監視し、また木曾谷から外に出ようとする木曾檜や、加工品の漆器、曲げ物、さらに木曾馬等の抜け荷等も監視の対象であった。他藩の番所と同様、贄川番所も藩境からやや入った所に置かれた。

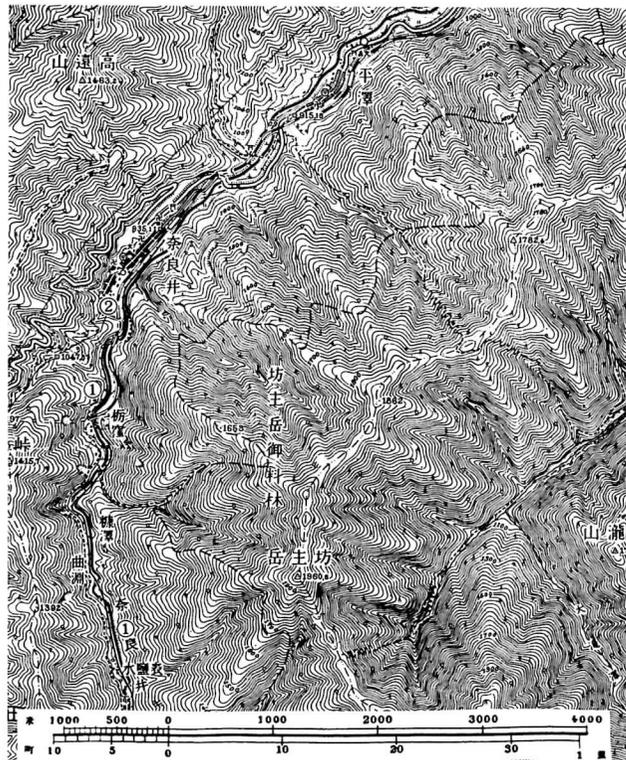
天保14年の『中山道宿村大概長』では、宿の町並みは南北四町六間（450m）で、木曾では最も小規模の部類に入った。南端に鍵の手があり、鉄砲町といわれたのも、他の多くの宿と同様である（長野県教育委員会、1984）。漏水の多い段丘上の土地のため、道路沿いに宿を貫く形の用水はなかった。しかし、北の贄川沢の水を引き、水場を設け、生活用水や防火用水とした。水道のできる昭和30年代はじめまで、宿内には6カ所の水場があった。

JR中央線贄川駅で下車、国道19号をしばらく南進し、欄干に鐘のある新関所橋で線路を越すと左手が昭和51年、地元住民の努力で復元した関所跡と、考古館である。旧中山道はこの関所跡から一段下って線路にそい、東側を下遠集落から、桜沢方面へ向かった。鐘の橋に平行する煉瓦のメガネ橋が明治の新道である。

明治末年、鉄道の開通時、レールの高さが贄川駅地点で限度のため、宿場西側を掘り割って線路を敷いた。この建設工事により、民家七軒が線路の西へ移転し、七軒町の町名の由来とされている。以後、時代の推移のなかで、宿周辺の段丘は以下のような変貌を続け今日に



第9図A 平成年の奈良井宿周辺
①橋戸沢 ②宮林署渡場



第9図B 昭和6年の奈良井宿周辺
①森林軌道 ②木製飛行機工場

至った。

贅川宿...2) 周辺の変化

贅川小学校を間に、南を贅川沢、北を下カラ沢に、東側をJRに限られる折戸地区は、国道沿いの八軒以外、すべて段丘上にある。

贅川沢の南へは、にえ川林道、七軒町、観音寺、麻衣神社と続くが、全て同一の段丘面で、折戸の住宅地の乗る面と同じ高さにある。この面は緩やかに東へ下り、JRを越えて中山道の通過する贅川宿にそのまま連なる。

贅川宿の南西には、贅川宿からは一段高い、JR権現トンネルの通過する段丘面がある。権現トンネルは昭和58年の軌道の複線および直線化改修工事のできたもので、以前の軌道は贅川宿上町から東に大きくカーブ、丸庄漆器店の真下の旧権現トンネルを抜け、桃岡集落を分断して平沢へと向かった。権現トンネル上の段丘面は上原（かんばら）と呼ばれている。上原から折戸までの段丘面は一面に黒ボクで覆われ、表面近くでは、平沢南原のようなたぐさんの礫は見られない。楢川村では、機械を入れるための農業基盤整備を実施したのは、上原をふくむ贅川地区だけであった。

これら、黒ボクに覆われた鉄道以西の段丘は、昭和30年ころまでは一面の桑畑であった。昭和30年代後半からは、権現トンネル上の段丘（上原）では衰えた養蚕に代えてカラマツを植えたりしたが、村の農業委員会は信濃小梅の栽培を奨励、権現段丘はじめ、折戸や長瀬の山裾の緩斜面に植樹された。

贅川宿周辺の、いちばん下位の氾濫原は、従来は水田だった。その水田は、減反政策下で昭和54年、水田転換債の活用で、夜間照明付きの野球場とテニスコートへ姿を変えた。

昭和30年代はじめ、贅川沢上流から右岸に水路を引き、贅川宿の東町裏の段丘上が開田された。昭和34年には保育園が完成したが、その周りはまだ田であった。その田も昭和40年代後半、地域住民の集会や冠婚葬祭のできる生活改善センターへ変わった。かつては苦勞して開田した土地だが、宿付近では、他の用途への転換が速やかであった。

段丘上の畑では、自給用の野菜を除いては年々雑草が生い茂る状態が広がり、放置された桑の木も伸び放題で、それにツル草がからまり、モンスター状になっていた。昭和59年から、荒廃した桑園の利用転換・再生事業が県の手で始められた。これと、農業活性化による村おこし事業を合わせ、県の資金を活用、贅川地区は半ば放置状態の畑地を基盤整備して、桑や雑木を抜根整理、機械を使えるよう整地した。村おこしと農業再生を結んだ事業は、木曾谷では楢川村が最初であった。贅川地区の住民は農家組合を作り、楢川村観光協会とも連携、サヤインゲン、ウド、タラの芽、サルナシなどの栽培を始めた。JR贅川駅東の水田も、サルナシ栽培に転換され、車窓から見える支柱は基盤整備の結果である。

土地利用の変化で、住宅地に関しては、折戸が好例であろう。そのほか、七軒町から権現段丘に続く段丘面でも宅地化が進んだ。

贅川小学校の北側の折戸はもとは桑畑で、昭和30年には民家が8軒ほどみられたのみだった。この地区に住宅が増えたのは、昭和43年、桑崎集落の集団移転があってからである。それ以来新築される家屋が次第に増え、贅川沢より北側の折戸の世帯数は、昭和30年の26から、昭和60年の44へと増加した。贅川小学校北側ではすでに区画整理をしてあり、JRの駅に近

く、住民の多くが村外通勤者で、地区には独特の雰囲気がある。

贅川沢以西では、漆器関連の建て物や、食堂（ドライブイン）がある。昭和40年、現在の国道19号がJR中央線の西側の段丘上に、宿を避けて開通した。それにそって、段丘上のカラマツ林を開き、昭和40年代はじめ、ドライブインが開業した。続く昭和50年代の始めから半ばには、S漆器店とM漆器会館が19号をはさむように店舗を出した。M漆器会館は旅行会社と契約し、貸切バス団体旅行者に休憩地を提供し、喫茶室を置き、漆器を陳列して客にアピールを図っている。自家用車の客を迎える体勢をS漆器店もとっている。昭和30年には、麻衣社（あさぎぬのしゃ）参道の入口付近の2軒を除き、それから南の上原一帯には人家はなかった。しかし国道19号の開道いらい、次第に宅地が増え、昭和60年までに、かつての桑畑とカラマツ林には16軒の家ができた。

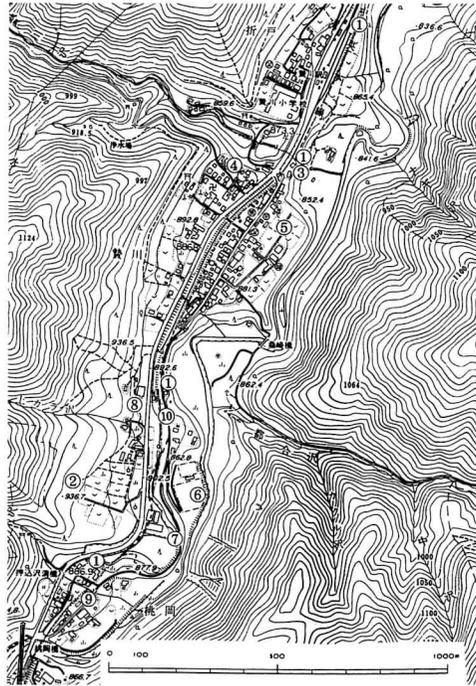
平成2年、下遠集落から長瀬集落までの間に9漆器業者、従業者86人を数える。それらの内8軒は19号に沿い工場や店舗を出したものである。贅川宿内にはただ1軒の業者があるのみで、贅川宿では地場産業と宿の景観が無縁である。

2. 地場産業の集落...1) 平沢中心部

南端の馬籠と妻籠を除いて、木曾谷の中山道の宿場のほとんどに鉄道の駅ができています。だから、木曾谷では、宿場は、集落として残り、廃ってしまうことはなかった。そうした中、平沢のような、本来は宿場でなかったものが、産業（漆器業）が成長して大きな集落へ発展し、それが、鉄道に駅を作らせたというのは特異である。すでに述べた贅川宿は鉄道開通後も、住民の生業の中心は農業と林業で、その2つとも勢いのない今、宿には空き地さえ見られる。かたや、漆器業がなお盛んな平沢では、屋敷地は隙間なく、住居と工場と、表通りの漆器店の店舗とで埋められている。漆器以外に、日用雑貨店、美容院、時計・カメラ店、自転車店などが間に入り、空き地はない。

宿場と同様に、手工業の漆器は住居と敷地の形態を、間口が狭く奥行き深い短冊形にして、それは現在にもよく継承されている。しかし、対岸の旭町や、後にふれる宮下地区は、戦後の新興住宅地なので、短冊形の地割りはみられない。旭町には宮下地区の倍ちかい数の工場があるが、それでも看板は散漫で、「マチ」を感じるような景観ではない。

平沢の町は、大きくは、中山道に沿う上・中・下の三町と、その両わきの、東町・西町、



第10図 贅川宿周辺

- 1.旧中山道 2.上原（権現段丘） 3.にえ川関所跡（復元） 4.七軒町 5.昭和30年開田地 6.水田転換債適用グラウンド 7.M漆器会館 8.ドライブイン
- 9.国鉄旧軌道 10.村営住宅

奈良井川寄りの金西町などの、既存の区域と、上流奈良井宿寄りの檜川小学校付近とその周辺の母沢・太田地区、対岸の旭町、役場下の宮下地区などの新興の区域とから成る。

平沢の集落の中では、中山道の通りが、町並形成で一番古い。ここに、戦前からの歴史のある老舗の漆器業者が集まっている。さらに、蒔絵、沈金などの高い技術をもつ人達もこの区域に多い。ここで修業した人々は職工として独立して、西町や金西町に工場と住居を構えた。戦後になると、従業員で独立したり、あるいは独立していた業者の二・三男は、旭町や宮下、さらに、太田や母沢地区に工場と住居を出していった。こうして、平沢の集落は、特に戦後の高度成長の時代に、大きく膨張した（第5図参照）。

中山道の通りに沿う、上・中・下の三町と、両わきに東・西・金西の三町、それに太田と母沢を加えた区域の、平成2年の世帯数と人口とは、それぞれ、307・1,180人であった。これと、同じ時期の、関連部門を含めた漆器業の事業所数と従業者数は、115・506人であった。漆器業では概ね、住まいはそのまま就業地でもある。就業者数に非労働力の世帯員数を加えた数が住民の数であるとすれば、先の平沢の中心の集落では、ほとんどの家が漆器業に関わる何らかの仕事をしているといえる。事実、日用雑貨や時計の商店をしながら漆器業に従う家もある。

そしてこれらが、林立する看板のような景観となって現れるのである。

地場産業の集落...2) 宮下地区

村役場の旧道を挟んだ反対側は、役場よりも一段低い、奈良井川の河原である。宮下は、坊主岳から下って奈良井川に入るモチ沢に東端を限られ、町内は県営住宅を中心とする地区と（宮下北）、その南の地区（宮下南）とからなる。ここはかつて平沢区に割り当てられた村の委託地で、昭和30年ころまでは、河原の中の畑で、県営住宅団地のあたりに、平沢青年会の手作りの運動場があった。昭和30年の国勢調査の資料では畑の周辺に、11世帯45人の家が記されている。旭町地区と違い、昭和30年になっても宮下地区の住宅は増えなかった。しかし、昭和30年代なかば、その運動場に県営住宅を作る計画が具体化し、それに続き40年代にさらにこの地区に住宅が増え、平成2年には、宮下北では、県営住宅40世帯を含む61世帯を数えた。宮下南地区では34世帯に達した。南北両地区の住民は400人を数え、この中には、居住地およびその近辺の作業場で漆器業を営む者が、17軒、従業者数は32人である（平成2年の工業統計）。

地場産業の集落...3) 平沢対岸の旭町

平沢集落の奈良井川の対岸は、もとは南原と呼ばれ、山林と畑のほか、墓地があり、中山道に沿った古い平沢集落の人々が耕していた。昭和25年の国勢調査では、南原には13世帯、68人の住民がいた。昭和30年には、これが22世帯、101人に増加、さらに昭和45年には60世帯、235人となった。昭和30年代から40年代までの住宅の増加は急であったが、それは昭和32年に、土地改良事業で、南原の農地を一巡する延長1.5kmの農道が完成したからであった。この農道はすぐに村道となり、10年後には舗装された。そしてこの頃から南原でなく、「旭町」の呼称が定着した。昭和60年、旭町の世帯数は81、住民は333人となった。そして、これ以降住民の増加はみられない。この旭町には、平成2年、倉庫もしくは作業場を持つ漆

器業者は25軒、従業者数は67人を数える。

旭町には、宮下地区の倍、漆器業で働く人がいる。しかし、このどちらにも、平沢の中山道の通りに見られる景観や、雰囲気はない。中山道の通りには、訪れる客と折衝し、客に看板と製品をアピールする働きがあるが、後者には、作業場だけがあればよいのである。

なお、すでに示した1:50,000地形図でも、図版の新旧の比較によって平沢周辺の変容を知ることができる。第9図のAは平成元年の発行、同Bは昭和6年の発行である。Bの平沢周辺には、「南原」・「宮下」・「太田」・「綿沢」などはまだない。昭和30年すぎでもまだ、平沢周辺の集落や土地利用の様子には変化はなかったが、その後の高度成長期を経て変化した景観がAの地形図には記載されている。

3. 交通路に沿う集落...1) 桜沢・片平・若神子・桃岡

桜沢は檜川村最北端の集落で、戦前から、養蚕を熱心にしてきた農家があった。養蚕は戦後もしばらく盛んで、昭和50年ごろまで続けられていた。

幹線交通路に直面した桜沢集落は、鉄道や国道が開通したり拡幅改修される都度、大きな影響を受けた。明治期末の国鉄中央線の開通では東側の山腹斜面を削り、桜沢集落の使っていた用水の1本が犠牲になったという。昭和40年の国道19号の拡幅舗装工事では鉄道の通過する斜面をあまり削れないので、集落は数メートル分西、奈良井川寄りへ移動した。もともと川までの余地はわずかなところへ、この時の工事で、桜沢はいっそう崖っぷちの集落となった。その後、昭和54年からの国鉄の複線化工事は、集落から遠い山ぎわにトンネルを掘ったので、今では、国道19号わきの崖の上の古い軌道敷にかつての様子が僅かに残るだけになった(第6図参照)。

桜沢から贅川までには、奈良井川の左岸の段丘上を、次第に高度を上げながら、中山道沿いに、片平、若神子、中畑、下遠、そして折戸の順に小さな集落が続く。これらの集落のめいめいが独立した形であるのは、集落と集落の間の沢が、段丘面を深く侵食し、耕地や家並の連続を阻んだからである。桜沢と片平の間を、奈良井川と一ノ沢が、片平と若神子の間を二ノ沢、若神子と中畑の間を宮沢、中畑と下遠の間を川鳥沢、下遠と折戸の間を下カラ沢が、それぞれ切り込んでいる。小さいながらそれぞれの集落は、単独で寺か神社をまつてきた。

鉄道開通時、線路は片平集落の手前で奈良井川を渡り、そのまま左岸を贅川駅まで登った。その際、一里塚や耕地を潰した。昭和54年からの複線電化工事で中畑集落の下で奈良井川右岸へ軌道が移り、片平と桜沢の集落は車窓からは見えなくなった。

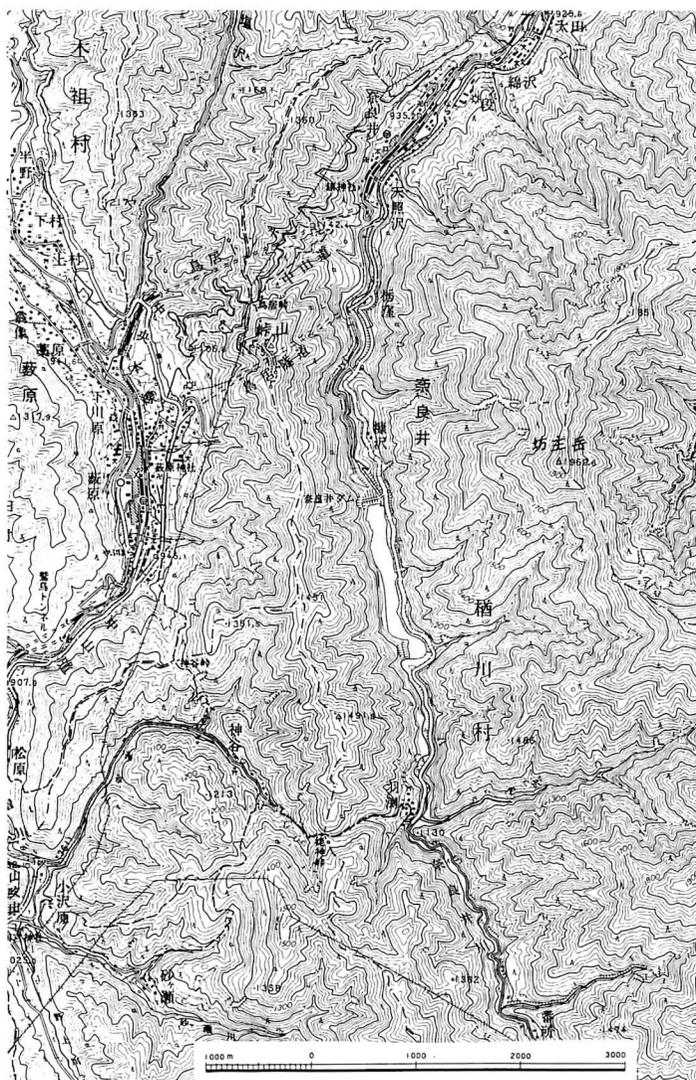
贅川宿と長瀬集落との間の桃岡集落は、中央線の開通時、線路のために東西に分断された。

昭和54年、電車の速度アップのため新権現トンネルが掘られ、軌道が直線化され、空いた桃岡集落の軌道敷は村へ売却された。第10図の破線が古い軌道である。旧トンネルの贅川側の軌道跡には、村営住宅が建設された。いっぽう、国道19号の改修は、桃岡集落には恩恵となった。昭和40年の改修工事に際し、建設省は、押込沢の出水の時洪水が桃岡部落をそれ、国道をつたって南へ流れ、奈良井川に落ちるよう、道路を設計したからである(第10図参照)。

交通路に沿う集落...2) 番所・楠・萱ヶ平

権兵衛峠から下ってきた道は、川入分校が昭和45年まで置かれていた番所を過ぎ、羽瀨集落を通過して姥神峠を越え、日義村に出る。羽瀨から分かれて奈良井に至る道は、今は奈良井ダムの東側を通過する、平坦な舗装された立派な2車線になっている（村道川入東線、第11図A）。これは昭和57年に完成した県営奈良井ダムのために湖底に沈んだ、奈良井川沿いの川入林道に代わる道路で、県が作った。村は現在県道への移管を希望しているが、まだ実現していない。

権兵衛街道は、もとは鍋掛峠と呼ばれ、荷を積んだ牛馬の通過ができなかったのを、木曾宮越村神谷（現日義村）の牛方の古畑権兵衛が改修を志し、木曾11宿の間屋も協力して、元禄9（1696）年に完成し、塩尻方面を經由せずに伊那が直接木曾へ入るようになった。そ



第11図A 平成元年の川入地区
（奈良井ダムの完成後）

ここで白木や旅行者の通過を監視するため、尾張藩は権兵衛峠への登り口に番所を設置、番人を置いた。権兵衛峠や姥神峠は多くの御岳講信者も通過して、姥神峠には石仏や石碑が今なお幾つも残る（第11図AおよびB）。

明治末の中央線と、大正始めの伊那電鉄の開通で、権兵衛峠の通行は一時廃ったが、昭和60年、国道361号線に昇格し、トンネル建設による大改修がいまや始まろうとしている。

川入の交通路は、奈良井から番所まででも3里半余（15km）あった。道路は大正期までは、大体は奈良井川の河床にそっていたが、羽淵や、今ではダム工事で無人になった奥塩水（上の原）の集落などは段丘上にあったの、通過のために、道は河床からの登りと下りを反復した。昭和2年、上流の御料林の伐採のため、奈良井から川入を経て黒川方面に至る森林軌道が敷設された。2年後に運行を始めた軌道は、森林鉄道よりも線路の規格が低いの、重い機関車は入れず、輸送力も限られてはいたが、生活物資の搬入が非常に容易になり、川入方面の人々には貴重な輸送手段となった。この軌道は、通常の伐採作業では山に入る通いの作業員を乗せ、空のトロッコを曳き、帰路は大きく重い用材を積んで下ろした。途中での行き違いのため、電話も架設されていた（第11図B）。

しかし山仕事は国有林だけではなく、民有林でも盛んに行われ、戦後もしばらくは薪炭材が大量に搬出された。それで、空のトロッコを営林署の機関車で引き上げてもらい、民有林の薪炭材をこれに積み、人が乗り、制動を掛けて下ることも盛んに行われた。

機関車はガソリンエンジンだったが、戦後しばらくは燃料がなく、木炭ガスを代用したため、事故や故障が頻繁に起きたという。冬季は積雪や凍結で走行困難なので運休止、もっぱらオーバーホールにあてた。軌道は脱線転覆のような事故を防ぐため、保線要員による軌道巡視を絶えず必要とし、また車両の整備のため、国鉄奈良井駅に接続する軌道終点には整備車庫が置かれ、整備員も配置されていた。

檜川村は軌道以外の輸送手段を確保するため、薪炭需要が旺盛であるのを見越して、昭和23年11月から林道川入線の建設を始め、のべ3,000万円と9年間を費やし、昭和32年、完成した。営林署も輸送力増強のため軌道を廃止して、林道建設に着手した。結局檜川村は上ノ原（奥塩水）集落までを、それ以遠を営林署が分担する形になり、昭和33年秋、全線が完成し、その年の暮から松本電鉄のバスが萱ガ平集落の手前まで通うようになった。

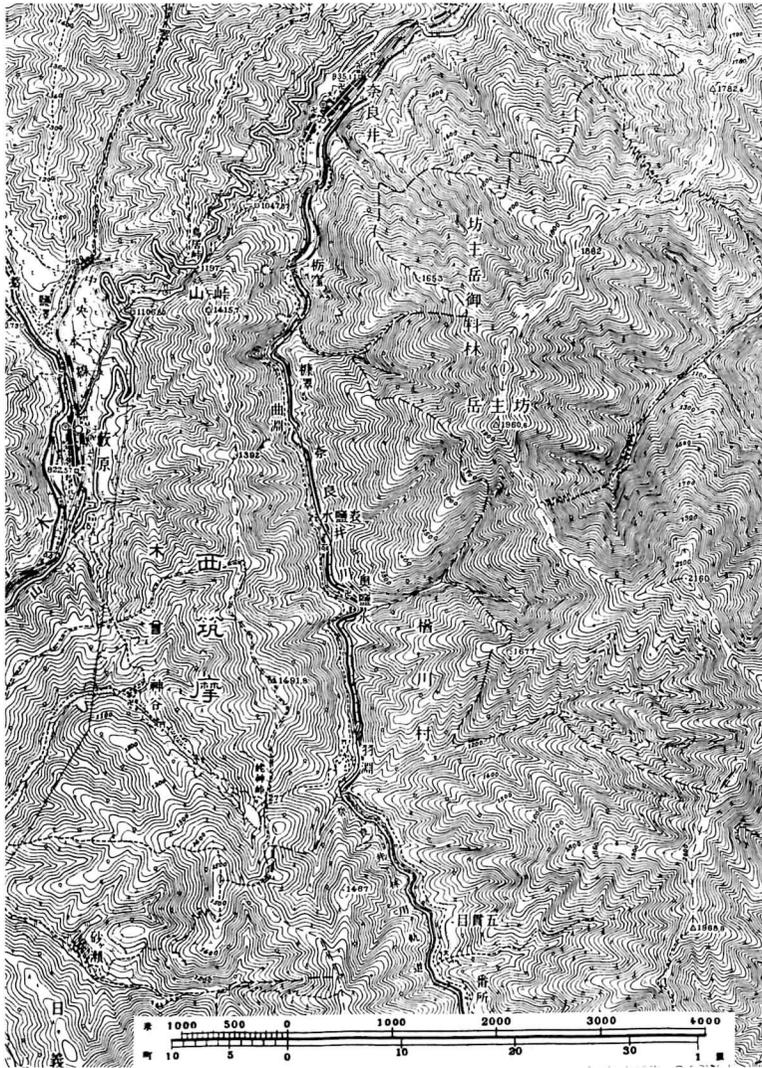
川入の交通は、このように、近世の牛馬交通の開始から、近代の御料林への編入、さらに昭和の30年間の森林軌道の時代、それに続く20年余の川入林道の時代を経て、ダム完成後の、拡副舗装された、「村道川入東線」の現在へと至っている。

旧図ではダム水没前の集落を下流から上流へたどることができる。軌道があったので、道路への依存は小さかった。その狭い道路は特に川入下では奈良井川の河床から少し離れ、段丘面を上下していたもようである（第11図B）。

4. 林業で生きてきた川入の集落

.... 檜川村と「雇用される」林業

奈良井宿より上流の川沿いの、栃窪・糠沢・曲淵・塩水・羽淵・番所・楠・萱などの集落



第11図B 昭和6年の川入地区
(奈良井ダムの建設前)

は、林業で生きてきた。林業も、自営でなく、雇われて収入を得るそれで、雇い主は、奈良井営林署であった。昭和35年国勢調査の地方集計結果は、檜川村を三地区に分けただけであるが（川入は奈良井に入る）、それでも川入の人々の生活を理解できるよすがになる。以下に35年国勢調査の結果を要約しながら、川入の人々の生活を述べる。

まず、昭和35年当時、檜川村全体で林業から生活の糧を得ていた世帯は177、世帯人員は837人であった。林業は村民の生活にとって、製造業に次ぐ重要な部門であった（表-2）。林業で収入を得ていた世帯は、川入を含む奈良井が最多で117、次いで賛川45、平沢は最も少なく15であった。林業収入が自営によるものか、賃金給料を主とするものかの別では、檜川村全体においてすでに後者、賃金給料が主、が155世帯、87.6%である。賃金給料が主の

表-2 檜川村と、「雇用される」林業（昭和35年）

檜川村全体	家業収入が主の世帯		賃金給料が主の世帯		計	
	世帯数	世帯人員	世帯数	世帯人員	世帯数	人員
産業（大分類）						
林業	22世帯	102人	155世帯 (87.6%)	735人	177世帯	837人
製造業	152	887	184 (54.8%)	817	336	1704
卸・小売業	81	427	41 (23.2%)	177	122	604
奈良井地区						
林業	10	42	107 (91.4%)	492	117	534
製造業	46	252	86 (65%)	378	132	630
卸小売業	21	206	6 (27.6%)	29	29	135
平沢地区						
林業	6	26	9 (60%)	48	15	74
製造業	103	622	80 (43.7%)	366	183	988
卸小売業	51	272	21 (29.2%)	98	72	370
賛川地区						
林業	6	34	39 (86.7%)	195	45	229
製造業	3	13	18 (85.7%)	73	21	86
卸小売業	9	49	12 (57.1%)	50	21	99

昭和35年国勢調査地方集計結果から作成。()内は世帯総数中の賃金給料収入が主の世帯の%。

世帯の数は、奈良井107、賛川39、平沢9と、奈良井が断然多い。奈良井107世帯は、奈良井の林業世帯117の実に91.4%になる。同じ割合は賛川で86.7%、平沢で60%なので、奈良井の林業世帯は実質、林業労働者であった。営林署に雇用されて働く人々の仕事は、造林（植林と育林）と伐採が主で、当時の作業場は羽瀨集落周辺や、より奥地の黒川谷、白川谷であった。国鉄奈良井駅わきの貯木場には、森林軌道の車庫や倉庫があり、ここでは20人くらいが作業しており、奈良井宿の中の事務所には事務官や技官があわせて50人ほど勤務していたが、大多数の作業員達は川入の現場で働いていたのである。なお、賛川沢上流にも国有林があり、当時は造林事業をしていた。参考までに表-2には、製造業や卸小売業の数字も示したが、製造業では、奈良井でも平沢でも、賃金給料を主にする世帯は、奈良井が65%、平沢が43.7%で、林業に比べ、自営業の形態がずっと多い。

営林署の、昭和31年の雇用の記録では、川入下（栃窪、糠沢、曲淵、表塩水、奥塩水）36世帯中11世帯が、羽淵は25世帯中16世帯が、最上流の五貫目から萱ガ平までの41世帯中18世帯までが、世帯主が奈良井署の定期作業員であった。しかも、この中で、羽淵では3世帯まで、五貫目から萱ガ平では5世帯まで、一戸で2人が雇用されていた。定期作業員というのは、毎年雇用契約を更新するのであるが、年間10か月は連続して雇われ、経験年数が給与体系に加算され、希望を出しておけば次年度も優先的に雇用された。超過勤務の手当、労働災害や健康保健にも、国家公務員に準じた措置があり、相対的には、当時としては安定した職場であった。年輩の人々は概して御料林での勤務歴が長く、勤務地は奈良井営林署だけでなく、木曾の国有林一円にわたっていた。林業というと、普通は自営の林家がイメージされやすいが、川入はじめ檜川村では、林業従事者は、林業労働者だったのである。

III. 住民の去った集落

木曾郡内にあっては、強固な地場産業をもち、行政上の過疎地域にはならずきた檜川村であったが、集落単位にみると、産業の衰微や居住条件の悪化に伴い縮小あるいは消滅したものがあつた。

檜川村の、住民の去った集落を、具体的に追ってみる。

1. 農林業の不振とたたかった集落、桑崎

桑崎は南西から北東方向に伸びる断層起源のくぼみの緩斜面にできた集落で、その歴史はおよそ300年前からといわれるが定かでない。桑崎まで、桜沢側からだけ車道がある。勾配はきつく、3 km余で落差が200mになる。歩道は、贅川宿東町裏から奈良井川にかかる桑崎橋を渡り、都合沢の急斜面をよじるように登り、坊主岳に通じる林道まで落差約300mを、大人の足でも1時間はかかる。破碎帯にあたるため、土砂崩れが頻繁に起き、しばしば通行不能となった。かつては養蚕も営まれ、にえ川小学校桑崎冬季分室から少し登った諏訪神社境内には、弁財天の横に蚕玉様の大きな文字碑がある。

桑崎集落の土地利用についてみると、昭和40年の地区の面積は122.5ha、東西は1.4km、南北2.8km、住宅地は0.63ha、耕地は8.29ha、原野2.27ha、林野19.33ha、道路2,800m、その他河川など3,500mであった。明治初期の林野の官民有区分が桑崎に住む人々への、最初の打撃であった。さらに、上伊那郡小野神社の社有地の確定など、近代のはじめ、この地区では村民がいろいろ不利益を被ったようである（北原名田造、昭和62年）。昭和20年代いっぱいまでは有力な収入源であった山林の所有については、2町歩以上所有が7軒あつたが、最大でも3町歩どまりであった。2町から1町が2軒、1町から5反までは6軒、5反以下が2軒であった。用材生産でなく、薪炭生産をもっぱらしていた。薪炭の生産からは、戦後の昭和30年代はじめまでは相当額が得られていたが、燃料革命のもとで価格がおもわしくなくなり、35年の移動村長室で窮状が住民から訴えられた。

桑崎集落では戦後の檜川村で唯一、入植による開拓が試みられた。桜沢から車道を上がり、牛頭峠への道を左に送って桑崎集落に入ると手前の、道路の勾配がきつくなるあたりに拓かれようとした耕地は当初の予想よりも土地条件が厳しく、法（自作農特別措置法の開拓関連規

定)の期限内での検査(成功検査)合格は困難であることが判明、中途から増反計画に切り替えとなった。昭和30年のことであった。関係農家は当初7軒であったが、増反になったので、他村から入植の農家1軒を受容できなくなった。

桑崎集落はそこで、苦境の続く耕種農業を見切り、肉牛生産に取り組んだ。桑崎のために中村村長と小林村議さらに園原県議も積極的に動き、昭和36年度に肉和牛肥育農業近代化モデル地区に指定され、のべ3か年間にわたり近代化モデル事業補助金300万円その他、草地改良補助金150万円、大豆生産振興費40万円などが投下された。こうして7戸の協業経営により5か年計画で発足した、楢川牧場と牛肥育協同組合であったが、借入金の負担が重く、さらに肥育技術の不十分、地勢気象条件も悪く、負債が累増、経営が行き詰まり、昭和40年7月5日に解散処理となった。桑崎分校の校舎の手前にこの時の石作りのサイロがまだ立っている(第8図)。

結局昭和43年春、桑崎の住民全員が集落を去ることになった。村当局は、村外転出者には資金援助を、村内への移転者には贄川地区折戸へ宅地を準備して円滑な移住に努めた。住民17戸中、村内移転の11戸が贄川の折戸に移った。ここは贄川小学校の東側で、奈良井川の左岸の高位段丘上にあり、日当たりがよく居住には快適であった。残りの6戸のうち3戸は塩尻市へ、岡谷市と辰野町に各1戸、埼玉県に1戸(1人)であった。

移転した時点での各戸の世帯主の職業は、自営の林業が6、自営の農業が1、営林署に雇用されていたもの3、運転手2、漆器関連の木工2、漆器販売1、ガソリンスタンド1、無業1、であった。

桑崎に決定的に不利だったのは、就業先を贄川方面に求めると、通勤が大変だったことである。川入と違い、桑崎集落近くの国有林は施業規模が小さく、継続的な雇用機会をあまり生じなかったのである。

桑崎集落の戸数と世帯員数の変化は表-3のようであった。

昭和35年以降の戸数と住民の減少をはっきりみてとれる。

ついで、住民の、教育との取り組みをみる。小中学校の運営には、時代とともに揺れ動く地域の姿が如実に映ずる。桑崎の分校では複式学級がとられ、4年生以上の学童は本校の贄川小に通学させたが、生徒の通学が大変だったところから、贄川に冬季のみの寄宿舎設置を試みるなど、分校の扱いに、村当局も教育関係者も長く苦慮してきた。

桑崎集落に設置されていた贄川小学校の冬季分校(戦後は贄川小学校桑崎冬季分室)を巡る動きを『贄川小学校沿革史』(昭和48年刊)から摘記してみると、

表-3. 桑崎集落の戸数と世帯員数の推移

年次	戸数	世帯員数
昭和25年	31	164人
30〃	30	155
35〃	26	124
40〃	22	105
43〃	17	77

楢川村役場資料による

…本校から6キロ、山間地にあるこの地区は、冬季分室以前にも分校を持って、地区の教育にあたってきた。明治13年に派出所が設置され、同25年には小学校令実施に伴い、贅川尋常小学校の桑崎分教場（4年以下）となり、昭和6年3月廃校に至るまで53年の歴史を刻んできた。この時の廃校については記録がなく、定かでないが、古老や関係者の談話から推察するに、不況のどん底で村財政の逼迫が分校維持を不可能にしたと思われる。とにかく、分校廃止以来16年間は、1年生といえども、6キロの山坂の難路を、雨の日はもちろん、厳寒の冬も風雪に耐えて通学し通したのである…（以下略）とある。

戦後、冬季分室設置の動きは桑崎集落の住民から起きた。昭和23年5月に村でも分室設置を決定、すぐに校舎建築に着手、9月に落成、12月1日から分室運営開始になった。その間住民達は児童のあるなしに関わらず全区あげて全ての作業に協力した。

昭和23年、檀川村は長野県教育委員会あて、学校設置に伴う学級編成認可申請書を村長名にて提出した。記された5つの理由には、今なお胸をうたれる。しかしそれにつき、本報告では詳細は先の『贅川小学校沿革史』に譲り、これ以上は立ち入らない。

学級は当初より40年まで複々式学級で運営された。担当教諭によれば、本校生徒に対してひげ目を持たせないため、授業では大きな声で話させたり、本校生徒より先にローマ字を習い、それで本校生徒へ手紙を書き、感心されたという。1年から4年までの生徒数は、昭和30年代いっぱい15人を上下していたが、40年9人、41年4人と急減、昭和42年度からは該当児童がいなくなり、将来の見込みもなく、廃室が決まった（木曾郡檀川村贅川小学校、1973年）。

2. 湖底に沈んだ川入下の集落

現在は奈良井ダムのダムサイトになり、ロックフィル式のため一際堰堤が厚く大きく、ダムの偉容に圧倒され、もう思い浮かべるのが難しいが、その下にかつては川に沿って点々と集落があった。昭和30年10月現在、ダムサイトのほぼ直下の曲淵集落には、4世帯17人が住んでいた。そこから少し上流の、奈良井川左岸の表塩水集落には、4世帯19人がいた。さらに上流の、左岸段丘上には奥塩水（上ノ原）集落があり、10世帯61人が住んでいた。その他に、奈良井川右岸には糠沢と栃窪の集落があり、それぞれ、ダムのたん水区域となる所に耕地や山林を持っていた。ダムのたん水面積は約0.375km²であったが、水没地のほとんどは急傾斜の山林（薪炭林）で、用材向けの植栽樹は少なく雑木が大半で、住居のまわりにだけわずかに畑地があった（前掲第11図B）。

ダム建設にあたり県が買収した土地は、畑727a、山林原野50ha、宅地95a、墓地198a、であった。また、水没はまぬがれたが、周辺の状態が大きく変わったことで、畑87a、山林原野15ha、宅地22aも補償の対象となった。移転補償の対象家屋は、水没19戸、コア材採取地1戸、土捨て場2戸で、このほかに、神社5棟、公民館1棟、バス停留所4棟などもあった（長野県・長野県土木部、1984年）。移住した人々の移住先は、塩尻市13戸、木曾郡内4戸、村内3戸、松本市1戸、その他県内1戸、であった。移住者に対しては奈良井地区ダム対策委員会や村当局が移転先の斡旋の労をとり、移住先を確保した。

第11図のAとBには、ダム建設前と後の様子を比較した。旧図Bは昭和6年、新図Aは平

成元年の発行である。旧図では、ダムに沈んだ集落、森林軌道、奥塩水、羽瀨、五貫目、番所など各集落に、畑のあるのもわかる。新図では、村道川入東線が羽瀨まで開けられているのがわかる。

川入下水没4集落の世帯と人口については、昭和34年11月には36世帯160人が住んでいたが、40年10月には35世帯132人になり、さらに45年10月には25世帯88人へと、居住者が次第に減っており、55年の国勢調査時にはわずか7世帯29人となっていた。昭和55年までにすでにさきの22戸は移転を済ませていた。なお、この時の国勢調査では、ダム工事の関係者146世帯158人（男146・女12）が、糠沢を中心の居住地として、一時的に「檜川村民」になっていた。

転出対象者の家屋22棟には計1.1億円が支払われ、そのほか、休日だけ山を見にくるなど平素居住していなかった家屋32棟には1.78億円が支払われた。家屋周辺の宅地には、形状変更への補償も含め1.138億円、畑には1.1825億円、水没あるいは工事で伐採した立木竹類には1.132億円が支払われた。転出した村民は個人の山をあまり持ってはおらず、奈良井林野保護組合の山を借りていた。補償総額から村そのほかの共有財産分を除き、個人の財産相当部分のみについて集計すると、補償額は一戸当たり約2,726万円となる。

平成3年の住民基本台帳では、ダムへの水没を免れた川入下の、栃窪集落は6世帯20人・糠沢集落は2世帯8人で、計8世帯28人である。平成2年（1990）の農林業センサスでは、農家は6戸で、所有耕地が5a以上10a未満は3戸で、いずれも5aである。田はなく全部畑である。これとは別に、保有山林面積が1ha以上あるのは3戸、10a未満が2戸である。

なお、奈良井ダムの建設と周辺地域については、詳しくは平成8年に刊行される『檜川村誌 現代編』を参照されたい。

3. 人口減少の続く川入上の集落

川入の、権兵衛峠の登り口を控えた番所のあった位置に、天保11年に始まる鍋掛學塾設置以来の檜川小学校川入分校があったが、昭和45年に130年におよぶ歴史を閉じた。川入地区の住民の生活について、記念誌『川入分校沿革』（檜川小学校編、昭和45年）は、「...なんといっても生活収入の中核は、昔も今も営林署の仕事にたよっているといい、現在はその傾向がことに強く営林署の仕事が主で農業はほんの片手間仕事になっている...」と記している。同沿革誌によると、昭和34年、開通した松本電鉄バスを利用、川入の、まず中学生から、平沢の本校へ通学するようになった。中学の分校がまず廃止された。翌35年から、小学校5・6年生も本校へのバス通を始めた。41年からは羽瀨の小学生は全員本校へ、そして45年に川入分校が廃止されたのであった。

平成3年の住民基本台帳では、羽瀨集落には13世帯28人が居住しており、90年農林業センサスの農家は12戸あった。経営耕地は30a以上が1戸だけあり、10a以上30a未満が4戸、10a未満が7戸であった。段丘上に耕地と集落があるのは糠沢や栃窪と同じだが、前者は奈良井川沿いの耕地を水没で失っており、残った耕地は少なかった。反対に、羽瀨は段丘上だけに耕地を有し、ダムの影響は受けなかった。羽瀨の段丘面は広く、その分耕地も広がった。羽瀨では、蚕種用の養蚕を長く営んできた。高冷地なので桑は根刈せず高仕立てされ、霜害

をのがれるため、夏蚕と秋蚕しか飼育しなかった。その養蚕もすでにみられなくなっている。

川入下地区と同様、川入上地区でも、国有林の事業規模が縮小してからは、人口減少が続いて今日に至っている。以下に数字で追ってみる。昭和30年、権兵衛街道が集落内を通過していた羽淵集落のさらに上流の、権兵衛峠麓の、番所、楠、萱ヶ平の集落には、合計41世帯188人の住民がいた。10年後の昭和40年、羽淵集落には24世帯128人が、番所から萱ヶ平までの集落には35世帯148人がそれぞれ住んでいた。さらに、奈良井川最上流の国有林では、5世帯50人が滞在して作業に従事していた。昭和45年、羽淵は単独の統計区でなくなり、羽淵を含む権兵衛街道沿いの集落（川入上）が38世帯132人になった。これは昭和55年には30世帯118人に、さらに昭和60年には、川入下地区も統合され、川入全部合わせても住民は31世帯95人を数えるだけになった。平成2年にはさらに減り、24世帯64人である。ちなみに、国勢調査とは数え方が少し違う住民台帳（一定期間居住した者のみ集計される）では、平成3年には、栃窪6世帯20人・糠沢2世帯8人・羽淵13世帯28人・番所2世帯4人・萱ヶ平4世帯8人、計27世帯68人であった。

人口と世帯の減少が続く中で、道路が整備され、分校がなくなり、稲作もほどなく姿を消し、短い間に、川入地区の住民の生活は大きく変化した。

IV. 結 語

本報告は檜川村誌編纂の過程で得られた資料を元としている。それ故、百瀬康村長はじめ、編纂室の、渡辺 泰、上條生両氏のご尽力、お力添えには深甚の謝意を表したい。そのほかお名前をあげられなかったが、多数の職員の方々にも厚くお礼を申し述べたい。

いまや時代が変わり、自治体では、どんな機会でも大切にして、外部から村を訪れた人々には村をよくみてほしい、村を知ってほしいとの意向が強くなってきている。研究と行政は本来は別のものかもしれない。けれども、村に暮らす人々が我々の作業の中にいくらかでも使えるものがあるならば、我々も喜んで提供したいと思う。

参考文献

- 島田安太郎（1970）『木曾谷の地質』 木曾印刷 192p.
 木曾郡檜川村檜川小学校（1970）『川入分校沿革』 13p.
 木曾郡檜川村贅川小学校（1973）『贅川小学校沿革誌』 366p.
 長野県教育委員会（1984）『歴史の道調査報告書 I 中山道』 pp.81-91 信毎書籍出版
 北原名田造（1987）『わが師わが友わが人生』伊那毎日新聞社 334p.
 長野県土木部・奈良井川改良事務所（1984）『奈良井ダム工事誌』 850p.
 檜川村役場（1990）『広報ならかわ縮刷版』 第一巻（昭和12年-36年）および第二巻（昭和37年-平成2年） 檜川村

Summary

Distribution, Landscape Transition, and Function Change of the Settlements Composing Narakawa-mura, a Small Municipality, Kiso-gun, Nagano-ken, Central Highland Area, Japan

Takahiko Yoshida

A settlement is a place where people live, interact and cooperate their activities. It can vary in size, appearance, and function.

This report aims to reconize and describe the spatial structure of the Narakawa-mura. For the purpose, settlements composing the area will be classified and analysed following their locational positions and their facilities in the context of the landscape sequential transition.

At first, locational features of Narakawa-mura as a whole will be described. Next, major three settlements will be dealt with and characters each of them are analysed. Finally, another small settlements will be picked up and described their features.

1. Narakawa-mura's location as a whole

On the bank of Narai-River that is one branch of the Shinano-River system, in the Narai-Rivers uppermost valley section, and on the eastern footside of the famous Torii-Pass, those are, the locations of Narakawa-mura.

Historical trunk line Nakasendo has passed through Narakawa-mura, that was connected to almost all Japanese important places via the Nakasendos linkage, and trades and communications with other districts has been very favourable. It has been easy for people of Narakawa to access and to take in other area's various advanced technologies and cultures subsequently. Those high accessibilities has strongly characterized and has supported people of Narakawa and are facilitating even today. At closely ending time of the Meiji Era, Nakasendo had transferred its role completely to the National Railway Chuo-Line. Those major three settlements in following has obtained railstation service from the starting, although Hirasawa were little behind and from the early Showa Era. The favourable conditions for trade and commerce has been kept and accessibilities are more highly graded-up.

2. Settlement classification

Settlements composing Narakawa-mura can be classified as follows by examining their sizes and functions.

The former ones are the major and the primary ones, three settlements, the others are smaller and subordinated ones.

The former three members are, Narai, Hirasawa and Niekawa. Their community functions were likely as those of small urban centers and their origins could be traced back to the Middle Age, that were, stage towns or its variations. Their inhabitants have been relatively large closely or over 1,000 persons, that resulted in appearances with crowded build-up housing, arranged with traditional woody buildings and streets.

The latter settlement group has also common characteristics within themselves. Their location has been far away from the Narakawa-mura's central core zone, and they have situated dispersedly from each others.

They respectively have had small populations and were afforded with inadequate community services those of shopping, school, medical, and local government. Presently depopulations are processing and only high aged retired people are keeping their life modestly.

Members of the latter group were Kawairi-kami, Kawairi-shimo, and Kuwasaki.

3. Three major and primary settlements

Along and tapping Nakasendo (and along J.R., R.19 similarly), three major settlements have been located. Among them the Narai settlement (Narai-shuku) occupied southwestern and the most upstream corner. About 3 kms downward was Hirasawa's location and Niekawa was similar distant more downward. Three were on the valley floor or on the alluvial terrace of Narai-River.

Narai-shuku (-shuku means stage town) has its historical origin in the end of the Middle Era, and been prosperous by inn services during the Feudal Age. Narai was also famous for its handmade products those as urushi-painting women's hair brush with fine arts, many people were engaged in. Domestic woody vessels such as lunch carriers and meal boxes and wooden buckets were the same goods and were the other factors made Narai had been prosperous.

A large portion of Narakawa-mura territory was the forest of nationally-owned. From the Feudal Age to the Post Modern Times, Forest administration agencies were changed drastically. At the first, in Feudal Age, Owari-Clan supervised and managed forest productions.

It was followed by the Emperor's Forest Administration System from the early Meiji Era till the Japanese Defeat. At last Central Government National Forest Administration under the democratic New Constitution has owned and managed the forest resources. Forest Management Administration Office has been situated at Narai-shuku and many people had been engaged in forest development works.

At the early Showa Era, small light railroad was constructed and linked Narai national

rail station to uppermost Kawairi-kami region. This narrow gage light rail service had made Narai-shuku the log deposit and transportation center. Employment opportunities engaged in forest works and log traffics were expanded, resulted in the prosperity of Narai.

During 1970s both forest development and wood processing industries were declined and Narai-shuku went into a slump. But its old woody buildings and its traditional street arrangements has been remained and began to make appear themselves for tourists. Narai-shuku has a nice view in harmony with surrounding mountains. Historical and traditional landscapes of Narai-shuku are now be recognized as a priceless object to be protected and reserved forever. Tourism is now becoming an important activity in Narai.

Hirasawa is a typical settlement where most of working people are engaged in special industry and its related sectors. The industry of Hirasawa has been shikki (often called JAPAN) production and selling on which peoples life and economy mainly based and has been composed of many small cottage works.

Their origine has been often interpreted as Middle Era. But its virtual establishment as one of the modern industrial sector and its starting of rapid growth could be traced back to the early Showa Era, when the railstation Hirasawa completed and began traffic service. Since then materials purchasing and products selling become very favourable for the shikki industry. Symbolized popular products those days were dinner tray called "ozen".

The second development turning point of the shikki industry was the 1960s and 70s rapid market expansion with new products, living room tables called "zataku". That has welcomed then in Japanese newly obtained or owned home furniture balancing traditional life style. Those were coincided with the Era so called High Rate Growth.

Under new "zataku" boom, prosperity of shikki industry has attracted more people to settle there. Periphery of housing area has grown and extended beyond their former margin. Miyashita and Asahimati in the vicinity of Hirasawa settlement area and formerly vacant land were the dwelling tracts newly came into existence.

For shikki manufacturing, indispensable material is a lacquer ware called "urushi" most of them has been imported from the China. Narakawa-mura's people have eagerly devoted themselves to develop and to establish friendly relations with the Chinese people by conducting mutual visitings and various events.

Shikki industry is one of the typical handworks based on craftsmanship and almost whole workshops are occupying the same space together with dwellings. Likely many other cottage industries, shikki industry has been very space saving industry. So public investment such as drinking water supply, fire protection appliances setting, communication improvements as road pavement and telephone network extension, those all of them are means of upgrading welfare are simultaneously upgrading industrial foundations.

Niekawa is the Narakawa-muras third major settlement. As the northernmost territo-

rial guard point, Owari-Clan set a barrier which conducted a traffic check to examine passengers and commodities especially precious lumbars arresting to circumvent. Niekawa stage town was constructed adjoiningly because Niekawa was afforded by the dilluvial terrace of the Narai-River with adequate space. During Feudal Era people of Niekawa had engage in Nakasendo inn service and that was a sidework of aguriculture or forest labours. The most of forest works were fuel production, among them charcoal was important as peoples main source of incomes. Some people had engaged in peddle trading, often shikki were dealt with among other commodities. Their trading areas extended wide teritories.

Niekawa railstation started its service from the opening of the Chuo-Line. It had contributed for the Niekawa area through shipment of agricultural and forest products and import miscellaneous manufactured goods from other districts.

Present day the area around Niekawa settlement, the land formerly aguricultural use are converted gardually to new housing tracts. Younger people of Niekawa settlement are more and more select and engaged in secondary or tertiary occupations operating in the urban areas, i.e., Shiojiri or Matumoto. Railway is now becomes one of the commuting means.

4 . Far distant and dispersedly located small settlements

The members of another group settlements, far from the Narakawa-muras central area and dispersedly located from each others were, Kawairi-kami, Kawairi-shimo, and Kuwasaki.

The origines most of them had, was forest and lumbering workers dwelling points. Lived people had been almost wholly dependent on the income from lumbering, reforestation and log transportation works which were conducted by Narai National Forest Administration Agency. Those forest workers dwelling settlemets were equally on high altitude of 1,000ms or more, under highland climate with cool summer and severe cold winter, inevitably unfavourable for agriculture.

Topographically they had situated on the deep valley floor corner surrounded by steep mountains, or, located on isolated plateaulike slopeside. Settlements belonged to former terrains were Nukazawa, Magarihuti, Shiomizu those collectively named Kawairi-shimo, and Habuchi, Bansho, Kayagataira along Gonbei Route collectively named Kawairi-kami. During 1970s latter half Kawairi-shimo disappeared into lake bottom with Narai-Dam construction. The Narai-Dam water were for domestic use in the Matumoto and Shiojiri urban areas.

Kuwasaki settlement located on isolated high plateaulike mountainslope and afforded with relatively wide space for arable or pasture land except unfavourable high altitude.

Presently, under the circumstaces that the imported lumbars are highly competitive

and are prevailing over the domestic market, people who had been engaged in forest industry could not stay and keep their life in their working place, has to leave off their homeland searching for new occupations, resulted in those settlements depopulated.

Kuwasaki settlement depleted at the latter half of 1960s. Because its location was on the isolated high plateau and difficulty of commuting had suffered people who began then to find income sources not in the primary industry sector within their residential area but in the secondary or tertiary sectors by commuting with outer areas. And people had to give up to stay their home settlement.

We can follow the threads of history in Narakawa-mura by the tools of geography, describing the landuse transition and the changing peoples lifestyles, as mentioned above.